

本草綱目

5
4435



群
玉



~5
4435

昭
和
九
年
九
月
三
九
日
購
求



行年七十

光琳

九

为

吉川煙崖氏

通禧題

通禧

八

初

善人等は是れを善くす

清き水なり

さるる(あま)

香教見抄叙



吉川家三代通称を名幼名長きり
好又同一此水觀又以此坊の號の享
保未年酒生初の二の誕生寛文
未の青陽末通九の七十一を限
しる月を記しはるる終止るはるる

吉川家三代通称を名幼名長きり

好又同一此水觀又以此坊の號の享

保未年酒生初の二の誕生寛文

未の青陽末通九の七十一を限

しる月を記しはるる終止るはるる

古の在りしは、
志は、
道は、
修身齊家は、
教を布、
時弊、
統、
北、
教、
信、

東、
林、
深、
何、
、
東、
百、
、
、

明治三十一年五月九日

此水觀吳水撰



吉野山人書



可成之科

此水觀吳水撰

吉野山人書

眼起佛道連款一順

日取吾言... 以梅... 寺依石士

... 成佛... 吳水

... 煙崖

陽のあけぬるを　あけぬるを
 是よりあけぬるを　あけぬるを
 春子
 信子
 勇子
 見己
 如松
 遊中
 妹水
 耕之
 若景
 月影のあけぬるを　あけぬるを
 東よりあけぬるを　あけぬるを
 年奉のあけぬるを　あけぬるを

駒馬のあけぬるを　あけぬるを
 是よりあけぬるを　あけぬるを
 家りのあけぬるを　あけぬるを
 孫のあけぬるを　あけぬるを
 早のあけぬるを　あけぬるを
 福のあけぬるを　あけぬるを
 袖のあけぬるを　あけぬるを
 解のあけぬるを　あけぬるを
 岸のあけぬるを　あけぬるを
 百圓のあけぬるを　あけぬるを
 如雲
 萱堂
 菊木
 一井
 真芽
 深山
 昇幽
 白
 一樂
 我童

松の影をうけて

夕陽の光をうけて

松の影をうけて

夕陽の光をうけて

松の影をうけて

夕陽の光をうけて

松の影をうけて

石十句表

手向の松をうけて

東京

松の影をうけて

夕陽の光をうけて

松の影をうけて

夕陽の光をうけて

松の影をうけて

夕陽の光をうけて

松の影をうけて

夕陽の光をうけて

松の影をうけて

及浪

浦林

山

遊中

南汀

松白

景

雄

永楫

尋香

逸朗

千歌

松江

様一

真照

松舟

百々皆みづをむねくまの松柳
こゝろにまをさす松の影は水
舟木の月更替は香は月夜小
十之くさく川魁や百々香を
聲は香やもくさく今母川ぬ
初々々々香は百々香柳を
百々香のこゝろもやまを柳
舟木にまをさす松の影は水
こゝろにまをさす松の影は水
梅の香

前浦
堂丈
鶯渺
菊外
石丈
桂鳥
梅香
不言
袒拍

一々皆みづをむねくまの松柳
こゝろにまをさす松の影は水
舟木の月更替は香は月夜小
十之くさく川魁や百々香を
聲は香やもくさく今母川ぬ
初々々々香は百々香柳を
百々香のこゝろもやまを柳
舟木にまをさす松の影は水
こゝろにまをさす松の影は水
梅の香

柳葉
蒼川
後庭
天都女
梅香
採花女
同心女
保子
芳逕
寿存

福司 月夜小
 波 川を流る
 雪 香を散らす
 宗雄 月を照らす
 雲 霧を巻く
 耕 野を耕す
 石 山を削る
 山 雲を巻く
 高 雲を巻く
 海 雲を巻く

柳長 花を散らす
 三花 花を散らす
 好生 花を散らす
 一夢 花を散らす
 榎本 花を散らす
 松雪 花を散らす
 梅月 花を散らす
 中月 花を散らす
 花月 花を散らす

ち〜〜〜植〜〜〜柳〜
 海〜〜〜皆〜〜〜也〜
 拜〜〜〜皆〜〜〜也
 爺〜〜〜也
 花堤

柳〜人〜名〜
 柳〜
 侯〜
 世〜
 松〜
 苟文

名〜
 朝香

陽〜
 月〜
 了〜
 白〜
 美楓

一 海のほとり 舟の影を小
野石

伊勢

一 海のほとり 舟の影を小
耕る

世に 塵を只 一 舟の影を小
石高

百年のこゝろ 舟の影を小
社楽

伊豆

昔のこゝろ 舟の影を小
連水

昔のこゝろ 舟の影を小
田新見女

長崎

新川や 舟の影を小
窓曉

舟の影を小
一

讃岐

舟の影を小
海

香前

舟の影を小
晚翠

出雲

舟の影を小
曲川

阿波

舟の影を小
梅芳

加賀

舟の影を小
剛

おきかへし 故郷の 春の 月

東洞

百と勢の ことし 修る ける 月

桐裁

とく 相ふ 結ぶ ことし 月

百陽

に 水を ぬく ことし 月

琴涯

とく 人の ことし 結ぶ ことし 月

新島

華の 名 画 世に 小 聲 一 筆 の 跡

禿匙

思ふ ことし 梅の 句 自 向 也

泉山

多し 事 ことし 百の ことし

寸六雪

とく ことし 也 事 ことし 百の ことし

石井

朝の 事 ことし 華の 事 ことし 月

正綱

備前

甲山

北

所登

美信

紀伊

日向

美作

相模

甲斐

後志

北見

一 千松也 萬年松 廿一 廿二 甲山

百 松の葉を食す 松の葉を食す 蓮華 友

う さいりー やまを 廿一 廿二 白蓮華 翠竹

抄 の 葉を 食す 廿一 廿二 唐外

百 松の 葉を 食す 廿一 廿二 十六里

月 松の 葉を 食す 廿一 廿二 芝山

道 一 廿一 廿二 松窓

心 一 廿一 廿二 松窓

心 一 廿一 廿二 松窓

妻 松の 葉を 食す 廿一 廿二 左丈

妻 松の 葉を 食す 廿一 廿二 警友

中 尚 松の 葉を 食す 廿一 廿二 芥雨

解 松の 葉を 食す 廿一 廿二 枕仙

松 松の 葉を 食す 廿一 廿二 松窓

松 松の 葉を 食す 廿一 廿二 松窓

松 松の 葉を 食す 廿一 廿二 松窓

百 松の 葉を 食す 廿一 廿二 朝鳥

百 松の 葉を 食す 廿一 廿二 席岩

世

世

備中

陸奥

石見

夕陽の影をひきつゝ

晩山

又もや百年前の夢に

夕子

山嶺の南を流るる水

其株

流るる水もやそは

茅海

吾ももよほすは

滄海

木ももよほすは

蓬山

白雲もよほすは

枕山

安房

香もよほすは

伯志

梅もよほすは

梅壽

紅旭

紅旭

路采

路采

上総

上総

系

系

江

江

連

連

雲

雲

和

和

和

和

木之根も土も水も空も
木之幹も葉も花も実も

下総

林 仙

百も勢も自給足りて
木之香も只付ぬ

年 山 耕 有

一本の葉も花も実も
さゆも空も水も土も

可 甫 好 文

自給の香も只付ぬ
限も空も水も土も

松 山 書 弘

百年も空も水も土も
木之根も葉も花も

素 人 書 弘

木之幹も葉も花も
運も空も水も土も

松 山 尚 之

百も勢も自給足りて
木之香も只付ぬ

常陸

尚 之

一本の葉も花も実も
さゆも空も水も土も

旭 旦 可 昇

自給の香も只付ぬ
限も空も水も土も

月 堤 千 壽

木之幹も葉も花も
運も空も水も土も

真 石 空 嶺

白く清くしるし櫻を竹くくす由

春の日の光をくくしるし梅の

影をくくしるし梅の影をくくしる

影をくくしるし梅の影をくくしる

影をくくしるし梅の影をくくしる

影をくくしるし梅の影をくくしる

影をくくしるし梅の影をくくしる

影をくくしるし梅の影をくくしる

影をくくしるし梅の影をくくしる

影をくくしるし梅の影をくくしる

一山

いづれ

鳳

后

一

湖

湖

叢

比

三

陸前

白く清くしるし櫻を竹くくす由

春の日の光をくくしるし梅の

影をくくしるし梅の影をくくしる

影をくくしるし梅の影をくくしる

影をくくしるし梅の影をくくしる

影をくくしるし梅の影をくくしる

影をくくしるし梅の影をくくしる

影をくくしるし梅の影をくくしる

影をくくしるし梅の影をくくしる

影をくくしるし梅の影をくくしる

影をくくしるし梅の影をくくしる

東

仙

待

羊

仙

吳

三

標

三

永

樂

上毛

一 好
 一 力
 一 好
 一 子
 一 石
 一 瓢
 一 楽
 一 亀
 一 松
 一 翠
 一 舟

一 夢
 一 倭
 一 丹
 一 湖
 一 北
 一 左
 一 艸
 一 香
 一 庸
 一 絞
 一 櫓
 一 芳
 一 月
 一 光
 一 位
 一 月

磐城

去々川やま川くま家おはる
作らる即おあもや華くらり
てのり月ふもくもくもくもくも
百代もる香幽いやもくも梅も

羽前

ほこも向塔お旅くもは信喜
もも路の法も庭や舞う市
うまもくも信ももももももも
色も世もくもももももももも
何ほくもくもくもくもくもくも川

逸馬 柳埃 不哉 詩園 藤村 北嶺 波月 高哉

和も籠のふもまももももももも
百ももももももももももももも
ももももももももももももももも
ももももももももももももももも
ももももももももももももももも
ももももももももももももももも
ももももももももももももももも
ももももももももももももももも
ももももももももももももももも
ももももももももももももももも

香雨 暗庭 松年 松魚 一和 百谷 米石 姝菜 松韻 壽園

不達やとらふもむけふはる、あな
百の智のこゝろあつてはるる
あつてはるる神しこゝろあつてはるる
あつてはるる松しこゝろあつてはるる
あつてはるる梅しこゝろあつてはるる
あつてはるる松しこゝろあつてはるる
あつてはるる梅しこゝろあつてはるる
あつてはるる松しこゝろあつてはるる
あつてはるる梅しこゝろあつてはるる
あつてはるる松しこゝろあつてはるる
あつてはるる梅しこゝろあつてはるる

羽后

陰風
三敬
天海
松笑
系幽
英英
其新
漕舟

こゝろあつてはるる松しこゝろあつてはるる
あつてはるる梅しこゝろあつてはるる
あつてはるる松しこゝろあつてはるる
あつてはるる梅しこゝろあつてはるる
あつてはるる松しこゝろあつてはるる
あつてはるる梅しこゝろあつてはるる
あつてはるる松しこゝろあつてはるる
あつてはるる梅しこゝろあつてはるる
あつてはるる松しこゝろあつてはるる
あつてはるる梅しこゝろあつてはるる
あつてはるる松しこゝろあつてはるる
あつてはるる梅しこゝろあつてはるる

東都

一笠
樂之
松浦
病松
系風
系水
玉兔
三尖
翠翠

之梅 竹
 花 枝
 之 直
 真 之
 尺 矣
 芳 英
 花 辰 女
 松 真
 廣 榮
 光 榮
 知 德

故 等 佐 右 左 前 后
 香 華 枝 葉 花 果
 即 之 妙
 葉 月
 煙 崖
 松 左
 松 右
 北 左
 月 左
 崖 左

... 馬... 額... 業... 川... 十九... 又... 年... 月... 左... 年

... 鳥... 水... 代... 官... 年... 月... 左... 年

晴るく雲中月夕冷く
臨み西階より涼風
和物も架す胡麻も新く
玉敷はくまゆを穿て
るし塊も破る御聖代
まくと奇祭も川も流
実こり籠のふくと華も
しつと川も百年の春

月 崖 年 左 産 年 月 年
右 程 辨 行

柳も多し下はさきも
好籠一丈のさきや
百も勢のこりも
う川もさきも
白影也香りの
もこ碧のこりも
梅香もさきも
りしけのさきも
成るもさきも

越前
柳 一 井 白
如 雲 一 井 白
雨 汀 如 雲 一 井 白
及 浪 雨 汀 如 雲 一 井 白
苙 堂 及 浪 雨 汀 如 雲 一 井 白
甫 林 苙 堂 及 浪 雨 汀 如 雲 一 井 白
義 童 甫 林 苙 堂 及 浪 雨 汀 如 雲 一 井 白
甫 義 童 甫 林 苙 堂 及 浪 雨 汀 如 雲 一 井 白

ふ代はくくふはくふくくくくくくくくくくくく

遠くは梅の香ありしを

閑

百くは曲昔のしる梅の香を

有美

くはくくくくくくくくくくくく

もくくくくくくくくくくくく

正夫

くくくくくくくくくくくく

る年くるはははははははははははは

林菊

四方ふくくくくくくくくくくくく

有文

捧讀舊篇洋絶倫 追思風月醉吟人

採花吟屋神 想愁疎影暗香送愛春

西村閑

身くくくくくくくくくくくく

吉川燈臺影昇の夢 祖父故郷又伺

字くくくくくくくくくくくく

柳友くくくくくくくくくくくく

或りはくくくくくくくくくくくく

其

不もわかれられしはけり... 可はるるはゆきや七十年の月未の九月

百と習ふおき当... 社書此の觀感に云ふに...

程きうは... 果... 梅香... 梅う香や...

梅う香や...

此北

Faint bleed-through text from the reverse side.

成文

雪ふりし... 梅...

有峰

雪ふりし... 香...

娛水

百と習ふ... 梅...

陸海

雪ふりし... 香...

高原

雪ふりし... 香...

珀堂

雪ふりし... 香...

蓮水

雪ふりし... 香...

琴二

百年をくらすに新婦ふももる後

翡翠

曾孫燈籠をくらすに新婦ふももる後

七種のまじりて恵投のやうなる

科文——きりぎりす

あまのついでに——也芥草

嬉水

とをくらすに徳をくらすに

有峰

とをくらすに徳をくらすに

有峰

とをくらすに徳をくらすに

有峰

とをくらすに徳をくらすに

有峰

宙をくらすに徳をくらすに

有峰

とをくらすに徳をくらすに

有峰

とをくらすに徳をくらすに

有峰

とをくらすに徳をくらすに

有峰

とをくらすに徳をくらすに

有峰

とをくらすに徳をくらすに

有峰

とをくらすに徳をくらすに

有峰

とをくらすに徳をくらすに

有峰

とをくらすに徳をくらすに

有峰

とをくらすに徳をくらすに

有峰

史

移る所ありし今秋の候は
 編海に成る書生は是れ終る
 分貝之園に在りて
 之の月の露のまじりて
 清い位則ち水に似たり
 勝跡にほろ川 孫も心出
 奴もく下肩ももたす
 華の香のやうにほろり
 殊に沙ももろもろ
 右短弁行

殊 芳
 如 雲
 空 堂
 竹 雲

手向

曾祖父を世にこころをこころ

月影の移りゆく春を

祖父の餅を食ふはまきの

わが心は

美餅や清酒の味は

一丁入り身は

百の勢は

煙 産

親戚

春 子

其 柳

主 一

家族

あ〜世のこころに〜

清子

梅の香や〜

勇子

梅の花〜

克己

香〜

仲子

梅の香〜

憲子

好文同字集の〜

梅香〜

松の香〜

松子

東京

此水観字法〜

玉謀〜

玉謀〜

世小〜

東京

桑月

文書

此水〜

越前

此水

此水〜

一井

此水〜

如雲

此水〜

如雲

山行
及路
方山
方菜
豆車
竹山
稻月
耕空
弄幽
素芳

山行
及路
方山
方菜
豆車
竹山
稻月
耕空
弄幽
素芳

三省
龍芽
不危
姑休
一樂
一甫
殊有
甫林
茂亭
遊休

三省
龍芽
不危
姑休
一樂
一甫
殊有
甫林
茂亭
遊休

...の... 松乃... 虚 白

寄... 水

常... 吉川 寺科 煙 崖

家... 煙 崖

吉川 寺科

...

... 梅

...

...

...

...

...


...

...

...

...

④

玉のふきあけ 天を共にする年より其の管の
押さぬく一侍の情のこころは志のこころは
一常程の父の心より百年の相与の篇の二
魂をよめ女阿のこころは心は海内の風
古手向の書後読書心川の舟を綴る道福
作業の女徳のこころは心は心は心は心
の事よこころは心は心は心は心は心は心
感一也情のこころは心は心は心は心は心
のこころは心は心は心は心は心は心は心
改と換と云甫 七のこころは心は心は心は心


明治三十一年五月十六日印刷
全 季今月廿八日出版

東京市下谷區車阪町拾番地
上野停車場前
旅店 群玉舎

文音反

吉川 竹等

號 煙崖

遊書品

印刷者

田畑真之助

東京市浅草區北富坂西番地

